四、五歳頃までにつくられる能力の基礎

「幼児に漢字が覚えられるとしても、幼児に漢字を覚えさせて、どんな価値があるというのか」、「幼児には、もっと別な面に指導すべきものがあるのではないか」……ということをよく耳にします。

こんなことを言う人は、漢字学習の意義も価値も知らないばかりでなく、そういうことについて深く、真剣に考えてみようともしなかった人だろうと思います。

前にも触れましたし、後でも詳しく述べますが、“石井方式･漢字学習”は、漢字学習のために、他のいかなる領域の学習も奪うものではありません。“他の学習を妨げるから”という理由があるのならともかく、幼児が何もそこなわれずに漢字を覚えるということを、人々はなぜすなおに喜べないのでしょうか。まさか幼児におとなの特権を奪われる、というので恐れているのではないでしょうね。

現代の多くの心理学者や大脳生理学者は、「子供が、四、五歳までの間に、見たり聞いたり習ったりする事柄が、その子供の、その人間としての能力の基礎を決定する」という事実を明らかにしています。

「子供の知能は、四、五歳以降は、多かれ少なかれ、固定してしまうけれども、それまでの間に変化させうることの可能性は、意外に大きい」とされています。

その、子供の知能の発達を助ける最も効果的な方法は、“幼児期に知的な刺激を与えること”であって、具体的には、

① 早期に“言葉”の教育を施すこと。

② 早期に“文字”の教育を施すこと。

この二つであることが、明らかにされています。